

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月31日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2009～2012

課題番号：21320068

研究課題名（和文） 中国古代戦国期における楚文化の学際的研究——中原とのかかわりに注目して——

研究課題名（英文） Interdisciplinary Studies of Chu 楚 Culture in Warring States Period of Ancient China - Focusing on its Relation with the Central Plains (Zhongyuan 中原) -

研究代表者

大野 圭介 (ONO KEISUKE)

富山大学・人文学部・准教授

研究者番号：30293278

研究成果の概要（和文）：

中国古代戦国期における楚文化と『楚辞』文学の本質について、伝世文献研究・出土資料研究、及び中国語音韻学・計量分析等の新手法による研究の三方面から研究を進めた。その結果、春秋期の楚荘王が周の王位を窺いながら失敗したことや呉楚戦争の敗北がきっかけとなって、楚王に対する訓戒としての「天問」が制作され、これを伝承した巫者である屈氏一族が中心となって「離騷」等『楚辞』諸篇が制作され、漢王朝の受命を礼讃する歌としての郊祀歌へつながったことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

The research on the essence of Chu 楚 culture and *Chuci* 楚辞(*the Songs of Chu*) literature in the Warring States period of ancient China was made through the following three directions: research on literature handed down from ancient times; research on excavated documents; and research using new methods such as Chinese phonology, quantitative analysis. In conclusion: in the Spring and Autumn period Chu Zhuangwang 楚荘王 failed to usurp the throne of Zhou 周 dynasty and defeat in Wu-Chu 呉楚 war triggered the composition of *Tianwen* 天問 as an admonition to the duke of Chu. Then the Qu 屈 family who were hereditary shamans handed this down, and wrote *Chuci* poems such as *Lisao* 離騷, which led to the advent of *Jiaosige* 郊祀歌 as the hymns that praised the divine reign of the Han 漢 dynasty.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総計	5,700,000	1,710,000	7,410,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論

キーワード：中国文学、楚辞、楚文化、国際研究者交流、中原文化、出土資料、戦国期、先秦

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本における近代的な『楚辞』研究は、これまで竹治貞夫『楚辞研究』、小南一郎『楚

辞とその注釈者たち』、石川三佐男『楚辞新研究』等のすぐれた成果をあげている。それらは中国の研究者からも『日本楚辞研究論

綱』『近代日本楚辞研究之鳥瞰』等の論著で評価されている。

しかし『楚辞』はその特異性ゆえに、文学史の上では特異な文化の生んだあだ花と見なされがちであり、中原との関わりに視野をおいた研究は十分に行われてこなかった。加えて日本における『楚辞』研究は、従来、研究者が個別的に取り組む傾向が強く、研究会や学会による組織的な取り組みは十分とはいえない状況である。

そのような中、中国での『楚辞』研究の学会である中国屈原学会が主催する「楚辞国際学術研討会暨(および)中国屈原学会年会」へ、数回に亘って参加した有志の呼びかけにより、2005年夏、「楚辞学会日本分会」が発足した。以来参加者同士での『楚辞』研究に関する情報交換を続けてきたが、その過程で、『楚辞』の枠内だけに閉じこもらず、分野や方法論の枠を超えて、それらを有機的に融合させた研究の必要性が認識されるに至った。この認識をもとに立案されたのが本研究である。

(2) 本研究は文学・語学・思想の各分野からのアプローチ、伝世資料研究・出土資料研究・計量分析的研究等さまざまな方法論を試みる5人の研究者を核として、これらを融合した多面的な視点と学際的手法による研究の確立をめざすことが最大の特色である。

また楚辞学会日本分会と中国屈原学会との国際交流を基礎として、現代中国を代表する『楚辞』研究者を海外研究協力者に加えて緊密な連携をとり、個人的取組から日中共同の組織的取組への転換を図っているのも、本研究の特色である。

(3) 中国文明は黄河文明を濫觴として一直線に発展してきたという『史記』的歴史観は、とうに過去のものとなっており、古代中国の各地にあった多様な独自文化の有り様を探る研究は、かの地でもブームとなっている。しかし従来のように楚文化を単に「特異」と性格づけただけで終わらせてしまうのでは、古代中国の文化の成立や発展をダイナミックに捉えることはできない。楚文化が決して異端の文化として孤立していたのではなく、中原文化と相互に作用しあっていた様相を詳細に解明することは、中国古代文学史の見直しにもつながるものであり、中国思想史・文化史研究にも新たな地平を開くものといえる。

2. 研究の目的

(1) 研究目的の概要

本研究は、中国古代の戦国期において、南方の長江中流域の楚国に開花した「楚文化」が、北方の黄河流域のいわゆる「中原」の文

化とどのように影響し合い、発展していったかを、多面的な視点と学際的手法によって分析し、再検討することを目的とする。

楚文化の所産として最も重要な文学作品は、戦国末期の楚国で生まれた詩歌群『楚辞』である。『楚辞』の作品は屈原が主要な作者とされ、君主に容れられぬ賢人の悲しみの歌、巫祝(シャーマン)の神語りや魂よばいの歌など、奔放な想像力と情熱にあふれた浪漫主義的な作品が多く、儒家・墨家・法家などの諸子に代表される、主知主義の色合いの濃い中原の諸文献とは様相を大きく異にする。

本研究はこの『楚辞』を中心に据え、他の戦国期の諸文献や、近年発見が相次いでいる出土資料も用い、『楚辞』が楚文化の中でどのような位置を占めてきたのか、中原の文化とどのように相互作用を及ぼしてきたのかという問題を検討するものである。

(2) 研究期間内に何をどこまで明らかにするか

前節で述べた目的を達成するため、以下の課題を研究期間中の目標とする。

I 従来『楚辞』文学との関係を論じられてこなかった諸子等の文献を精読することにより、両者の間をつなぐミッシングリンクの解明をめざす。

II 楚地・中原の未公開のものを含む出土資料を精査することにより、『楚辞』の背景たる楚文化の特質、また中原文化と楚文化の差異や共通点を探り、それを『楚辞』の解釈へとフィードバックさせる。

III 民俗学・本草学・語学的研究や計量分析等、『楚辞』研究の新たな手法の可能性を探り、伝統的な文献研究や出土資料研究の成果と有機的に関連させていくことをめざす。

以上の研究に海外研究協力者による研究成果や助言も合わせて、『楚辞』と楚文化の形成や中原文化との相互作用について、多面的な視点と学際的手法によって創見を得ることが、本研究の最終目的である。

3. 研究の方法

(1) 『楚辞』を中心に、中原の諸子百家の文献、さらに『楚辞』以後の漢代初期の思想や文学の書物・作品をも視野に入れ、これらの相互関係を詳細に分析することによって、『楚辞』と中原文献の間のミッシングリンクを探った。

(2) 従来から出土文物の図像との比較による『楚辞』研究を進め、「戦国中期諸王国古籍整備及上博竹簡『孔子詩論』」(『詩経研究叢刊』第二集)等の論著がある石川が中心となり、『楚辞』作品・伝世資料全般・考古出

土資料（同地同時資料及び近年大量に発見されている戦国期の出土資料を含む）の比較考証をさらに推し進めた。

(3) 近年試みられつつある新たな手法による『楚辞』研究と、伝統的な研究との学際的連携を図ることは、本研究の眼目であり、『楚辞』における香草の民俗学・本草学の観点からの分析、計量分析的手法による屈原イメージの分析、中国語学の観点から『楚辞』における韻字の用法の分析を行った。

(4) 上記の個人研究を継続しながら、海外研究協力者との交流の成果にも意を配り、年1回の全体研究会を開催して統括と調整を行い、各研究を有機的に関連付けるように努めた。

4. 研究成果

(1) 研究代表者・研究分担者・連携研究者に加えて、大学院生やポストクの研究協力者、さらに中国の『楚辞』研究者の協力を得て、『楚辞』及び楚文化に関する伝世文献研究、出土資料研究、中国語音韻学・計量分析等の新手法の三方面から研究を進めたが、これらのうち本研究課題に沿った成果を以下に示す。なおこれらの成果は既発表のものも含めて論集『楚辞と楚文化の総合的研究』にまとめ、平成25年度中を目途に刊行する予定である。

(2) 『楚辞』作品が発生した背景を、伝世文献資料に加えて近出の出土資料などの新資料を駆使して探求した研究成果は以下の(3)～(6)及び(17)である。

(3) 戦国楚における各種の考古遺物や文献資料から楚文化の『楚辞』への影響を次のように結論づけた。楚地は長い間北方から軽視され、文化の発展も緩やかであったことが『楚辞』の作風形成に影響しており、荘王の頃に勢力を拡大すると「離騷」のような愛国意識・民族意識あふれる作品が生まれた。また楚地は豊かな自然環境があり、巫風が盛んなことに加え、天文知識が積み重なったことも、『楚辞』の浪漫主義に影響している。

(4) 『左伝』に見える楚人の「強死」が巫祝の預言の中に現れることに注目して分析を加えた結果、その背後には楚人の死後の魂魄への信仰があったことが判明し、さらに強死した者が悪霊と見なされ、楚巫によって祓除の対象となっていたことも出土資料から確認できた。このことは巫風が国家祭祀のみならず民間社会にも浸透していたことを窺わせる。

(5) 「離騷」に盛んに登場する香草群に本草学の見地から分析を加えた結果、それらは馬王堆出土医書にも薬草として多く記されており、巫医の知識を反映したものであることが明らかになった。これらの香草群は賢人忠臣の比喩ではなく、巫風を象徴するものと考えられる。

(6) 楚国にとって反逆の臣である伍子胥が「九章」で三回称えられていることについて、春秋・戦国期は国家への忠より父への孝が優先されたことが伝世資料からも出土資料からもうかがえることから、父を殺した楚王に復讐した伍子胥をほめていることを根拠に「九章」を後世の偽作と断ずることはできないと論じた。

(7) 戦国期から漢に至るまでに『楚辞』がどう展開したかを、出土資料・伝世文献・語学の各方面から探った研究成果は以下の(8)～(12)である。

(8) 「天問」について、「招魂」「大招」などの他の四言作品とは「兮」を用いない形式が共通するだけではなく、国家の命運を主題とする点でも共通することから、これらは本来楚国の繁栄と永続を願い、天下統一を目指す国策上に作られた作品であって、国家と作者自身の運命を悲しむ抒情作品とは別に発展してきたものであることを明らかにした。

(9) 「九章」については、そこで称揚される歴史上の賢士や廉士に注目して分析を進めた結果、その主題は屈原が自沈を前にその感懐を述べたというよりも、政治的混乱に直面して隠棲と守節との間で苦悩する士大夫の姿であることを明らかにした。

(10) 『漢書』礼楽志所収の「郊祀歌」十九首は『詩経』に似た四言形式の歌と「九歌」形式の歌が混在し、両者との密接な関連を窺わせるが、『詩経』の影響が表面的なものにとどまっている一方、「九歌」の影響は歌の構成や主題にまで及び、それは単なる模倣ではなく、漢王朝の大一統を讃美するにふさわしく改変されていることが明らかになった。「郊祀歌」全訳注も完成し、発表準備中である。

(11) 『楚辞』における「楚語」を中国語学の見地から分析した結果、王逸が既に『楚辞章句』で二十一条の「楚語」を指摘しており、現代の諸研究で二百七条まで見出されているが、それらの中には純粋な「楚語」とはいえないものも混じっており、出土資料などを援用した研究がさらに求められることを論じた。

(12) 『楚辞』の屈原・宋玉作品における韻字の使用状況を詳細に分析して韻表を作成した。これを分析した結果、時代が下る作品ほど押韻が齊一になり、一韻を連続して使う傾向が増してくることが明らかになった。

(13) 『楚辞』やその注釈に表現されている楚国や屈原のイメージの分析を通じて、『楚辞』がどのように伝承されていったかを探った研究成果は以下の(14)~(16)である。

(14) 『楚辞』における「楚」字の用法と出現頻度を分析した結果、「楚」字を含まない「離騷」「九歌」「九章」「天問」と、「楚」を他国と同様に扱わない「招魂」、「楚」を他国と同様に扱う「大招」や後期作品とで明確な違いが出た。これによって「大招」が「招魂」よりも遅れて成立したことが明らかになり、さらに『楚辞』作品が三段階に分かれて成立した可能性も示された。

(15) 王逸以前の賈誼・司馬遷・揚雄・班固らの屈原に対する評価は、その節操をたたえる評価とともに、他国に理解者を求めようとせず自沈したことに対する批判も見られるが、王逸『楚辞章句』は『楚辞』諸作品の主人公と孔子を無理に結びつけ、班固らの屈原に対する批判的な意見に反駁して屈原を孔子を継ぐ偉人とたたえ、『楚辞』の権威を高めようとしている。儒教一尊の社会が確立し、孔子の地位が高まった前漢末から後漢初期であればこそ、このような手法が『楚辞』の地位向上に有効であったといえる。

(16) 王逸『楚辞章句』の「離騷」注文から「登用」というメインテーマを析出し、それに関連する文字の頻度を調べることにより、屈原像の核心をなす「離騷」に対して王逸が抱いた屈原イメージの解明を進めた。その結果、王逸注の意味世界は「離騷」「九章」「九辯」「七諫」のように政治的抱負を強く抱く「入世」的世界と、「九歌」「天問」「遠遊」「招魂」などのような孤高・清潔を事とする「非入世」的世界とに分かれ、王逸が強い関心を示したのは前者であることが明らかになった。

(17) 以上の諸研究を総合しながら、『楚辞』作品を古代楚王国の「国策」としてとらえ、出土資料や考古遺物をも加味して検討した結果、『楚辞』作品の成立について新たな事実が浮かび上がった。即ち春秋期の楚荘王の「問鼎」失敗や呉楚戦争敗北がきっかけとなって楚王に対する訓戒としての「天問」が制作され、これを伝承した巫者である屈氏一族が中心となって「離騷」等『楚辞』諸篇が制作され、漢の天命享受礼讃歌としての郊祀歌

へつながったことを解明できた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

①吉富透・石川三佐男、『北京大学蔵西漢竹書情況通報暨座談会紀要』及び関連情報について、『中国出土資料学会会報』、査読無、第43号、2010、10-17

②大野圭介、『楚辞』九章諸篇における主人公の彷徨、富山大学人文学部紀要、査読無、第53号、2010、291-310

③石川三佐男、秋田中国学会第149回例会発表要旨「日本学者的中国古代文学研究方法論—三重証拠法(詩経編)—」、秋田中国学会会報、査読無、第38号、2010、2-3

④石川三佐男、楚辞文學と出土文獻『楚居』と傳世文獻を繋ぐ呉楚戦争という史實、中国出土資料学会会報、査読無、48、2011、3-5

⑤田宮昌子、王逸『楚辞章句』全巻における「離騷」テーマの展開、宮崎公立大学人文学部紀要、査読無、19、2012、59-78

⑥大野圭介、『楚辞』における「南国」意識、富山大学人文学部紀要、査読無、56、2012、395-418

〔学会発表〕(計13件)

①石川三佐男、日本学者的中国古代文学研究方法論—三重証拠法—、浙江大学人文学院學術講演会(招待講演、司会:崔富章教授)、2009年5月5日、浙江大学(中国浙江省杭州市) ※ほか4大学で同内容の発表を行う。

②大野圭介、論《九章》諸篇主人公の彷徨、楚辞学国際學術研討会暨中国屈原学会第十三届年会、2009年10月30日、深圳大学(中国広東省深圳市)

③石川三佐男、日本学者所見之『楚辞章句疏証』、楚辞学国際學術研討会暨中国屈原学会第十三届年会、2009年10月30日、深圳大学(中国広東省深圳市)

④石川三佐男、日本学者的中国古代文学研究方法論—三重証拠法(詩経編)—、秋田中国学会秋季第149回例会(招待講演)、2009年12月5日、秋田大学(秋田市)

⑤大野圭介、“詩”与“歌”——論《詩経》与先秦古籍所引之詩歌、第9屆詩経国際學術

研討会、2010年8月1日、新時代大飯店（中国河北省石家荘市）

⑥谷口洋、屈原と陶淵明のあいだ一辞賦文学と賢人失志の系譜、全国漢文教育学会教養講座（招待講演）、2010年7月28日、斯文会館（東京都）

⑦石川三佐男、《河伯》篇的“美人”和《山鬼》篇的“山鬼”的關係、浙江師範大学人文学院招待講演、2011年6月8日、浙江師範大学人文学院

⑧石川三佐男、近年の楚辭研究に見る多彩な成果と最新の動向について、中国出土資料学会、2011年7月16日、成城大学

⑨石川三佐男、古代楚王國の國策から見た楚辭文學の發生と展開、日本中国学会、2011年10月8日、九州大学

⑩石川三佐男、古代楚王國國策與《楚辭》諸篇及戰國楚竹書等出土文獻的關係、中国屈原学会第14届年会暨楚辭國際學術研討会、2011年6月4日、金沙大酒店（中国福建省東山県）

⑪田宮昌子、在王逸《楚辭章句》里挖掘屈原形象的原型、中国屈原学会第14届年会暨楚辭國際學術研討会、2011年6月4日、金沙大酒店（中国福建省東山県）

⑫大野圭介、《楚辭》的“南国”意識、中国屈原学会第14届年会暨楚辭國際學術研討会、2011年6月4日、金沙大酒店（中国福建省東山県）

⑬谷口洋、西漢《郊祀歌》十九章与《九歌》中国屈原学会第14届年会暨楚辭國際學術研討会、2011年6月4日、金沙大酒店（中国福建省東山県）

〔その他〕

本研究公式ホームページ

<http://homepage3.nifty.com/lisai/kakenzyc/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大野 圭介 (ONO Keisuke)
富山大学・人文学部・准教授
研究者番号：30293278

(2) 研究分担者

谷口 洋 (TANIGUCHI Hiroshi)
奈良女子大学・人文科学系・教授
研究者番号：40278437

石川 三佐男 (ISHIKAWA Misao)
秋田大学・教育文化学部・名誉教授
研究者番号：70222974

田宮 昌子 (TAMIYA Masako)
秋田大学・教育文化学部・名誉教授
研究者番号：70316199

(3) 連携研究者

澁澤 尚 (SHIBUSAWA Hisashi)
福島大学・人間発達文化学類・准教授
研究者番号：60344826

矢田 尚子 (YATA Naoko)
盛岡大学・文学部・准教授
研究者番号：10451494

(4) 研究協力者

野田 雄史 (NODA Takeshi)
佐賀大学・非常勤講師

吉富 透 (YOSHITOMI Toru)
青山学院大学・非常勤講師

田島 花野 (TAJIMA Kaya)
東北大学大学院・大学院生

中村 貴 (NAKAMURA Takashi)
(中国) 華東師範大学・大学院生

徐 志嘯 (XU Zhixiao)
(中国) 復旦大学・教授

黄 靈庚 (HUANG Linggeng)
(中国) 浙江師範大学・教授

湯 漳平 (TANG Zhangping)
(中国) 漳州師範学院・教授